

わたしが手を置いたことによって

テモテへの手紙Ⅱ 1 : 6 - 14



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第 17 主日

2025 年 10 月 5 日

上野聖ヨハネ教会

今日は使徒書に選ばれているパウロによる「テモテへの手紙Ⅱ」からお話します。

ある時期にわたしはこの手紙が好きだというか、非常な共感をもって繰り返し読んでいたことがありました。それも信仰や愛について語っている箇所ではなく、パウロが怒っているところ、教会の中にある許しがたい現実を痛烈に批判している箇所に強く引かれたのです。たとえばパウロはこう書いています。

「その言葉は悪いはれ物のように広がります。その中には、ヒメナイとフィレトがいます。彼らは真理の道を踏み外し、復活はもう起こったと言って、ある人々の信仰を覆しています。しかし、神が据えられた堅固な基礎は揺るぎません。」

2:17-19

実は今、テモテはこの種の人々によって非常に苦労させられているのです。テモテはエフェソという大きな町とその周辺の地域の教会の責任者。大勢の人々の信仰に責任を持つ牧師です。そのテモテがとても苦労し、疲弊して孤立感を味わっている。それを伝え聞いたパウロは、今、獄に捕らわれの身なのですが、何とか彼を支えたいと願ってこの手紙を書いたのです。

もう一箇所読みましょう。

「主の僕たる者は争わず、すべての人に柔和に接し、教えることができ、よく忍び、反抗する者を優しく教え導かねばなりません。」 2:24-25

これはパウロからのテモテへの助言ですね。その次です。

「神は彼らを悔い改めさせ、真理を認識させてくださるかもしれないのです。」 2:24

彼らは大きな間違い、罪に陥って、悪いものを教会に広めている。その彼らを神は「悔い改めさせてくださるかもしれない」。「真理を認識させてくださるかもしれない」。そうでないかもしれないのです。

このようなパウロの率直痛烈な言葉を読んだとき、テモテは、「自分のことをわかっていてくれている。自分が心では思っても口では言えないことを、代わりに言葉にして怒ってくれている」と感じたのではないのでしょうか。一緒に怒る、代わりに憤る。これが人の大きな助けになることがあるのです。

さて今日の最初のところを読みましょう。

「そういうわけで、わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように勧めます。神は、おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。」 1:6-7

「そういうわけで」はこの直前にパウロが書いたことを受けているのですが、どんなことを書いたのでしょうか。「わたしはあなたテモテの純真な信仰を思い起こしている」「あなたの涙を忘れることができない」と書いたのです。ほんとうにパウロはテモテを愛し、信頼してきた。かつて伝道旅行に出かけた際に、

パウロはテモテを同行者、同労者として選んで旅し、一緒に労苦したこともありました（使徒言行録 16:1-3）。そのようなこれまでの数々の大切なことを思いつつ、パウロはテモテに言うのです。

**「わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている
神の賜物を、再び燃えたたせるように」**

今、あなたは弱り果てているようだが、思い出してほしい、とパウロは言います。

「わたしが手を置いた」

かつてわたしはわたしの手をあなたの頭に置いた。手を置いて祈った、ということです。これは後の聖職按手につながります。聖職按手では主教が志願者の頭に手を置きますが、これは単なる形だけの儀式ではありません。按手によって使命とともに神の賜物を授かる。按手は神の力、命を受けることなのです。聖職按手だけではありません。信徒按手、つまり堅信式も実は同じことです。

**「わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている
神の賜物を、再び燃えたたせるように勧めます。」**

あの按手、わたしがあなたに手を置いて祈ったことによって、あなたは神の賜物を与えられた。それはあの時だけのものではない。あなたの中に宿り、生きつづけ、燃え続けているはずだ。その火を再び燃え立たせてほしい。

このように書いたとき、パウロは自分自身がかつて手を置いて祈ってもらったことを思い出していたのではないのでしょうか。30 年ほども前のことです。パウロ、当時の名はサウロは、イエスを迫害する者の代表格でした。多くのイエスを信じる者を捕えて苦しめ、また優れた指導者ステファノの殺害にも荷担しました。そのサウロはダマスコに行く途中、光に打たれて倒れ、「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」というイエスの声を聞きました。彼は目が見えなくなり、かろうじてダマスコのある人の家に世話になりながら、非常に苦しみました。自分が熱心にしてきたことは間違っていたのではないか。自分は罪のない人たちを苦しめ、命まで奪ったのではないか。そうと思うと、食事も喉を通りませんでした。そうして三日たったとき、アナニヤという人が訪ねてきました。アナニヤはサウロの上に手を置いて祈ってくれました。

「兄弟サウル……」

「迫害者サウル」である自分を「兄弟サウル」と呼んでくれた。

「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」使徒言行録 9:17

サウルの懺悔と感謝の涙とともに、目からうろこのようなものが落ちて、元どおり目が見えるようになった。けれども彼はただ元にも戻ったのではありません。迫害者サウロは、回心して伝道者パウロとなったのです。

それから 30 年の間、彼自身が迫害され、投獄され、何度も鞭打たれながら、十字架と復活のイエスを宣べ伝えてきました。多くの人がイエスを信じるようになりました。彼は今、自分が世を去る時が近づいているのを感じています。悔いはありません。感謝あるのみです。思い返せば、あのダマスコ途上のイエスとの出会いが、そしてアナニヤが自分に手を置いて祈ってくれたことが、すべての出発でした。アナニヤをとおして実はイエスが自分に手を置いて祈って祝福してくださった。あのとき、自分は新しい使命とともに神の賜物をいただいた。聖霊をいただいた。

けれども今、心配があります。諸教会のことがとても気がかりです。とりわけテモテのことが心配です。それでこの手紙の初めのほうでテモテに語りかけました。

「わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃えたたせるように」 1:6

パウロはこの手紙で、思いを尽くし言葉を尽くしてテモテを

励ましました。そして手紙の終わりのほうでこうテモテに頼みます。

「ぜひ、急いでわたしのところへ来てください。」 4:9

「あなたが来るときには、わたしがトロアスのカルポのところに置いてきた外套を持って来ててください。」 4:13

「冬になる前にぜひ来てください。」 4:21

パウロは獄に捕らえられていて、自分からテモテに会いに行くことができません。それでこう頼むのです。ほんとうはテモテがパウロの助けを必要としているのです。けれどもパウロは、自分がテモテの助けを必要としているかのように頼みます。

「わたしがトロアスのカルポのところに置いてきた外套を持って来てください。」

このように具体的に用を頼まれたら、テモテの心は動きます。自分のことを心配し、自分のために祈ってくれて、このような手紙まで獄中から書き送ってくれたこのパウロの頼みを聞かなければ。老いたパウロのために、寒くなる前に外套を届けなければ。こうテモテが心に思うとき、すでに彼の中の神の賜物は、聖霊の火は、再び燃え始めています。

わたしたちも、皆さんも、誰かに手を置かれて祈ってもらったのではないのでしょうか。たとえば、堅信式はその具体的な場面です。けれどもそれだけではなく、イエスは別の仕方でもわたしたちに手を置いて祝福してくださったと思います。

今あらためて祈りましょう。

主イエスさま、今、あなたがわたしたちのうえに手を置いてください。祈って祝福してください。おくびょうの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊を注いでください。それによって生かされて生き、新しくあなたに仕えることができますように。尊いあなたのみ名を賛美します。アーメン